
バーサスゴッド・オフライン

久保田

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バーサスゴッド・オフライン

【Nコード】

N8194Y

【作者名】

久保田

【あらすじ】

VRMMORobotアクションRPG『バーサスゴッド』。青野 菜月とその仲間達は、いつものようにゲームをプレイしていた。しかし、軽い気持ちで選んだ選択が、彼女達を戦いの深みへと連れて行く。そこは異世界、香るは硝煙。

ザム、大地に立つ

彼女の姿を見る者があれば、その身に纏った雰囲気にも声をかけるかもしれない。知り合いなら飯の一つでも奢るかもしれない。それだけ全身から切なげな、諦めの空気が滲み出ていた。

しかし、その姿を見る者は誰もいない。身体のラインが浮き出たブルーのパイロットスーツを縛り付けるように、二重のベルトで固定されている。

このベルトをするたびに身を守られていると考えるよりも、自分を逃がさないためのベルトだと彼女はいつも思う。

またも腕も伸ばせないほど狭苦しく、配線とコンソールに囲まれた真つ暗なコクピット。身体の左右に配置された操縦桿を握り潰そうとしているかのように、思い切り両手に力が入っている事に気付いた。

「リラックス……リラックス」

こんな風に呟いた所で意味はない。そうわかっていても言わずにはいられない。意識して、両手の握りを緩めていく。

『なっちゃん、大丈夫？』

「大丈夫。何とかいけそう」

頭の右斜め上に繋がったという感覚が通る。鼓膜を震わせる感覚もなく、僅かにノイズを含んだ音が意識を通る感覚には未だに慣れない。

これは一体、どういう技術なんだろう？といつもと同じ疑問を浮かべながら、青野 菜月は言葉を返した。

「きーちゃんこそ大丈夫？」

無駄な言葉だな、と思いながら、菜月は言った。　きっと彼女は、斎藤黄色はいつもの無表情をほんの僅かだけ笑みの形に歪めているのだろう。

それがわかっていても、中学生の黄色に気を使わせ続けるのは、ほんの少しだけ残っている菜月のお姉さんとしてのプライドが許せなかった。

『ん、問題ない』

「よし、じゃあ機体立ち上げちゃおうか」

『ん』

七つあるコンソールを、順番に叩くようにしてセツトアップを開始。　始めは立ち上げるだけで苦労していたが、今は目をつむっていても出来る。

それだけの事はしてきたし、それはきっと自分の力になっているはずだと菜月は信じようと思った。

コクピットに明かりが灯っていく。

前後左右に取り付けられたモニターが、外の景色を映し出す。

操縦桿で機体を操作し、立ち上がらせれば、視線の高さには杉によく似た木々の頂点。

少し高所恐怖症の気がある菜月からすれば、この高さは身が竦む。

「そついえば赤矢は？」

モニターに小さく黄色のバストアップの映像が映る。　長いサラ

サラの黒髪に、人形のように整った顔。しかし、への字に結ばれた口元が人形のような印象を裏切っている。

黄色の淡いイエローのパイロットスーツ。黄色の綺麗な身体のラインを浮かび上がらせ、非常に羨ましい。この胸についている不格好な塊は、あまり綺麗なラインを作ってはくれないのだ。

「ああ、兄さんなら」

「さあ、皆さんこんにちは！」

黄色の声を遮るように、ハイテンションな男が映し出された。普段着なら悪趣味としか言いようのない、キラキラ光るラメ入りのスーツが目痛い。

「バーチャルリアリティ技術はついにここまで来た！発表当初から、そう言われ続けて早三年。まだまだ当社がナンバーワン！これからもウロボロス社の誇るVRMMORobotアクションRPG『バーサスゴッド』ご贖願お願いします！」

マイクの音量が最大になっているのか、狭いコクピットに自画自賛がぐわんぐわんと響く。

言っている事は確かに間違いではない。ゲームセンターなどに設置された大型筐体売り上げランキングは、三年連続一位を達成している。

そのあまりの人気は、約一億円もする筐体を自宅に導入した猛者を産み出すほどだ。

後続のゲームを発表から三年経った今も上回る、圧倒的なまでに美しいグラフィックと、リアリティのあるロボットバトルは普段、ゲームをしない菜月も黄色に誘われて、始めてしまえばハマってしまうほど。

「今月もやってまいりました。 Aランク昇格戦！」

多くはないお小遣いから、一回五百円を捻り出してやっとここまで来た。

初心者狩りに弄ばれ、同格の相手にボロ負けして、何度やめようかと思ったかわからない。 しかし、それでも菜月はこの場にいる。その事だけは、しっかりと自分を認めてあげようと思った。

「ルールは簡単！ 最大三人までのチームで、八チームでのバトルロイヤル。最後に生き残ったチームがAランク昇格です！」

まあそれはともかく負けても仕方ないよね、と菜月は思い直した。肩からふつと力が抜ける。

Fランクから始まり、Cランクまではするすると上がる。 Bまでは努力次第で何とでもなる。

しかし、Aランクはこの月に一度のバトルロイヤル形式の昇格戦を勝ち抜かなければならないため、途端に難易度が跳ね上がり、万年Bランカーチームは大量にいる。 単純計算で八分の一。

しかし、単純な腕だけではなく、他のチームから狙われないようにする立ち回りも必要になってくる。

「きーちゃん、最初は目立たないように様子見しようね」

菜月の言葉に、黄色はそっと目を逸らした。

「……何そのリアクション。 って赤矢はどこ！？」

司会者の言葉で中断されていた問いを思い出した菜月は、辺りを慌てて見回す。

木々に囲まれた中でも、それは非常にわかりやすい。煙突のよ
うに長い、木々の上に筒先が飛び出るほどに長大な大砲を空に向け、
どう見ても分厚い鈍く輝く銀色の装甲を持った戦車。黄色の機体
だ。

「赤矢はどこに行ったの!？」

嫌な予感がした。普通にログインしているはずなら、同チーム
は視界の届く範囲に配置される。しかし、辺りを見回しても黄色
の機体しか見当たらない。

「兄さんなら……」

「ちょっと回線乗っ取らせてもらっぜい」

司会の姿がプツンと切れると同時に、新しい映像が浮かび上がる。
真っ赤な髪と鋭い目つきがやたらと印象に残る男の姿。まだ肉
付きのしっかりしていない肩には、学生服を羽織っている。

ただでさえ明らかにタチの悪そうな顔付きだというのに、更に不
愉快なにやにやとした笑いが乗り、一目見て彼と進んで付き合いを
持とうとする者はなかないだろう。
しかし、

「何やってんのよ、あんた!？」

斎藤赤矢のチームメイトにして、幼なじみでもある青野 菜月か
らしてみれば放っておけるような状況ではない。

「よう、菜月。 ちょっと黙ってる」

「あ、このバカ!？」

赤矢の特技はゲームとハッキング。完全に回線に乗っ取った赤矢は、菜月の通信回線を切ってしまった。

黄色との通信も出来ず、菜月に出来る事は赤矢の暴挙を、ただ黙って見ている事しか出来ない。

「Aランク昇格戦に参加のクソの皆様、こんにちは！ 本日は我々、チームSUNZU Riverのためにお集まりくださり、誠にありがとうございます！」

赤矢の挑発的な演説が始まった。耳を塞ぎたい気持ちを抑え、必死に機体のセッティングを変更していく。

手にしていた機体全体を隠せるような巨大なシールドを、背中にマウント。黄色の戦車もすでに砲身を水平に戻した。垂直から水平まで動く、現実の戦車では有り得ない砲身だが、そんな事を気にしている暇はない。

「今からワタシ達、SUNZU Riverの虐殺ショーを始めさせていただきます」

破壊力を重視したバズーカから、弾数だけが多いマシンガン二丁へと変更。近接戦闘用のサーベルをマシンガンの予備弾倉へ。

カウント3。長い付き合いは、この後の展開を菜月にたやすく予想させる。

「それでは貴様らがおつ死ぬまでの短い間、存分に楽しみやがってください」

カウント0。いきなりのゲームスタート。セッティング変更

は唐突に打ち切られた。

「きーちゃん！」

「うん」

通信回線が復活。 自分の機体を黄色の砲塔の上に、膝立ちの姿勢で載せる。

すでに暖機を始めていた黄色の戦車は即スタート。 キャタピラの代わりにホバー方式の戦車は、初速は遅いが一度走り始めれば二足歩行の機体とは比べ物にならないほどに速い。

「行くよ、シルバー」

菜月の機体を乗せたせいで、普段より鈍い加速となった黄色の機体、シルバー号が動き始めた。 そのじりじりとした加速は菜月の焦りを生むが今更、降りるわけにもいかないし、菜月独りで逃げるつもりもない。

「来た！」

菜月の機体のレーダーに反応。 赤矢の挑発のせいで、全方位から、

「ミサイル！ えっと………凄い沢山！？」

空を埋め尽くすような、木々にぶつかるたびに爆発し、その爆発の後ろからも大量に。 上からも横からも、数え切れないほどのミサイルが飛んで来る。

「赤矢のバカあ!？」

「バカとはなんだ! あ、筐体に入るまで、あと五分くらいかかるから頑張つて生き残れよな」

赤矢ののん気な言葉に耳を貸す事なく、菜月は両手に持ったマシンガンで、シルバー号の後ろから迫るミサイルをとにかく撃ち落とす。射撃はあまり得意ではない菜月だが、とにかく撃てば当たるほどの数が飛んでくる。

黄色も砲塔の横に取り付けられた二門の機銃を乱射しているが、まったく間に合っていない。

「きーちゃん、もう無理い!？」

「なっちゃんは諦めが早い。しっかり掴まって」

全方位から迫るミサイルは一瞬にして、二人の対応力を飽和させる。しかし、ハンドルを大きく切ったシルバー号は、その大きな尻を思い切り振った。

「正面、撃つて」

「わかったあ!」

黄色の冷静な声に、菜月は泣きそうになりながらも、反射的に従う。直撃ギリギリの距離まで近付いていたミサイルを撃ち落とせば、至近で爆発。

その爆風は尻を刺された馬のように、シルバー号を加速させた。

「うわあ!？ 腕が吹っ飛んだよ!」

「二人とも粉々になるよりはマシ」

爆風に巻き込まれた菜月の機体はマシンガンが高熱に炙られ、中の弾薬が爆発。右腕と正面装甲の一部が破損。

それに比べて、遥かに厚い装甲のシルバー号は、僅かに煤に汚れただけだ。

何となくやり切れない物を感じながらも、まだ追跡してくるミサイルを菜月は残った左腕に持ったマシンガンで、叩き落としていった。いきなりの大加速で、かなりのミサイルのロックを外したが、それでも大小三十ほどが着いてきている。

「正面、距離七〇〇。敵三機くらい!」

「報告は詳しくして」

シルバー号に一切のレーダーは積まれていない。と、いうよりもこのチームにレーダーを搭載している機体は菜月のみだ。

ミサイルを撃ち落としながら、必死にレーダーを確認する。

「え、えっと、固まってる! とにかく固まってるよ!」

「……そう」

「無理だよ、射撃と管制同時なんてさ!」

「それより撃つよ」

と、黄色が言った瞬間には撃っていた。

音というより、それは振動としか感じられなかった。身体を震

わせる轟音。 僅か二二〇〇の距離。 菜月の思考が追いつかない時間の中で着弾、三発。

レールガン方式の砲撃は異常としか言いようのない連射を可能にする。 フルに連射をすれば、二秒で弾薬が尽きるほど。

その速射性と一瞬で森を更地に変えてしまうだけの爆発力は、二足歩行型の機体が中心のバーサスゴッドの中で、シルバー号は最も人気のある戦車型の一つだ。

「二機撃破！ 残り一機は」

「目の前、轢く」

恐ろしい宣言を聞いた、と思った瞬間、あまり聞きたくない類の激音。 レーダーから進路上に敵影無しの報告あり。

「……いやさ、いいんだけどさ」

「何？」

アクセルを緩める気など一切無かったであろう黄色が、菜月には恐ろしい。 昔はあんなに優しい子だったのに……と嘆くと同時に、追ってきたミサイルを全弾撃墜。

「よし！」 「あ、ごめん」

声は同時だった。

ごっつん、と鈍い音が背中から聞こえた。 何？と考えるより、身体は勝手に操縦桿を操作し、機体に受け身を取らせていた。

「木が」

普段は無感情な黄色の声色に、わずかに申し訳なさそうな声が乗っていた。

オブジェクトとして配置されている木を、自然保護団体がマジ切れしそうな勢いで轢いていた黄色だが、シルバー号に轢いた木を乗り上げさせる事はなかった。

しかし、猿も木から落ちる、とでも言うべきか。さすがに木と敵の機体を轢くのは勝手が違ったのか、敵を轢殺した影響は僅かにシルバー号の安定を奪ってしまい、それまでコントロールして薙ぎ倒していた木が車体に取り上げ、菜月の機体に当たってしまった。背中に盾を回していたお陰で、ダメージは少ないが問題が一つ。

「あれ、これ敵のど真ん中じゃない？」

馬から落ちた間抜けを始末しようと、残っていた敵全てが菜月に向かっていた。

頼りになる味方は、すでに遙か彼方。シルバー号は最高速度は速いが、初速と減速と旋回性が非常に悪い、直線のハイウェイ専用。つまり、黄色が戻って来るまで、かなり時間がかかる。

「詰んだっばい!？」

片腕を無くしている上、菜月の機体は元々しょぼくれている。

バーサスゴッドは一チームにつき、千のコストが与えられており、その中で構成しなければならない。

黄色のシルバー号が四百、赤矢が五百、菜月は百。

量産機の傑作（という設定）であり、豊富な武装（ただし、最大の攻撃力を持つバズーカ、しかも最大弾数十発）高コスト機の牽制用の副武装並みの攻撃力）を持つ機体。

その名を、

「^が、頑張ろう、ザム！」

別名、初心者殺しの動く棺桶である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8194y/>

バーサスゴッド・オフライン

2011年11月24日11時48分発行